

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02188

研究課題名（和文）虐待を受けた子どもの家族理解とその支援に関する研究

研究課題名（英文）Research on family understanding and support of abused children

研究代表者

山田 勝美（YAMADA, KATSUMI）

山梨県立大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：70290640

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：児童養護施設に入所する子どもの家族に纏わる課題を明確化しつつ、その支援のあり方を職員調査及び当事者調査を通して明らかにした。結論として、彼等の抱える家族に纏わる課題とは、自己の再定義化をめぐる課題であった。それは、異質な自己、不確かな自己、存在意義の希薄な自己であった。支援としては、存在レベルの受けとめ、行動レベルの受けとめ、事実レベルの受けとめ、時間レベルの受けとめが、連続して循環的に提供されることによって、自己の再定義化は可能となることがわかった。また、この受けとめを可能にするものは、子どもを思い逡巡するといった「逡巡型」モデルが受けとめを可能とすることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

重篤な課題を抱えた子どもの入所が増加している児童養護施設において、より根源的に求められている支援とは何か、それが自己の再定義化という課題であること、また、職員による受けとめが、それを可能にすること。これは、今日の児童養護施設職員の日々のいとなみを可視化するものであり、また、その実践の意義をあらためて浮き彫りにさせたこと、そして、ケア論という意味でも、児童養護実践のもつ不確かさや曖昧さ、複雑さにあって、医療化や心理化が進行していると考えられる今日にあって、あらためて、求められる専門性についてその意義を唱えたという点において重要な学術的、社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：While clarifying the issues faced by the families of children admitted to child welfare institutions, we clarified the ideal form of support through staff surveys and surveys of the children themselves. In conclusion, the issues faced by their families were issues surrounding the redefinition of the self. These issues were 1) a heterogeneous self, 2) an uncertain self, and 3) a self with little meaning to its existence. It was found that self-redefinition is possible through the continuous and cyclical provision of 1) acceptance at the existence level, 2) acceptance at the behavior level, 3) acceptance at the fact level, and 4) acceptance at the time level. It was also found that this acceptance is made possible by a "hesitation type" model, in which the parents hesitate to act when thinking about their child.

研究分野：社会福祉学

キーワード：社会的養護 家族に纏わる現実 自己の再定義化の課題 受けとめ 生のいとなみの困難

## 1. 研究開始当初の背景

今日、重篤な課題を抱えた子どもの入所が増えているとされている。その背景のひとつが、虐待を受けて施設に入所することがある。「児童養護施設入所児童等調査結果」(令和5年)では、児童養護施設に入所する子どもの71.7%が何らかの被虐待経験を有していることが示されている。他方で発達障がいを抱えている子どもの入所も増えているとされ、同調査によれば、心身の状況に該当ありとされたものが42.3%となっている。こうしたなかであって、62.7%の子どもに「精神的・情緒的な安定の支援」が求められているとされている。

こうした数字だけでは示しがたい困難が現場にはあり、確かにいえることは、多重な課題を抱えた子どもの対応に現場は疲弊しているということである。

そうしたなかであって、2つの方向性がとられてはいないかという課題提起を行っておく。ひとつは、「医療化」ともとれる動きである。

ここでいう「医療化」とは、発達障がいを抱えた子ども等に、その行動や感情を統制するために、医学的な診断を行い、その結果として服薬させることを意味している。現在、多くの施設が、特に、発達障がいを抱える子どもの感情爆発等をコントロールするために薬を服用させている。

このこと自体に問題があると言いたいのではない。薬を服用することがあったとしても、生活のなかで子どもの居心地のよい暮らしをいとなむこと、つまり、丁寧な日々をいとなむことや子どものいわば行動と懸命に向き合うこともまた必要ではないかということである。暴れている、感情統制ができないからすぐに服用、またはそのような行動を防止するためだけに服用させる。私たちが子どもの苦悩に寄り添うことが疎かになってはいけぬ。これらがセットでないといけないと考える。

もうひとつは、「心理化」である。虐待を受けた子どもの入所の増加にともない、虐待やトラウマという概念で子どもの問題現象を捉え、その視点から子どもへの支援を展開するというものである。そのひとつの象徴が「トラウマ・インフォームドケア」である。児童養護に携わる現場職員向けの雑誌である『児童養護』においても、51巻で特集が組まれているのもひとつの証左であろう。

現場において、子どもたちの様々な問題事象に対応すべく、様々な対応を図ることは必要であるし、おそらく、現場は「藁をもつかむ」思いなのだと考える。子どもの行動を客観的にとらえられることで、その場をやり過ごせることがある。

だが、現実には、こうした手法を用いて解決するほど、おそらくは「あまくはない」のではないかと思う。いやむしろ、何とかしようという思いは否定しないが、何とかしようと思えば思うほど、悪循環にはまっていく可能性は高い。

私たちに今求められているのは、子どもたちの抱える苦悩を理解し、それにつきあう覚悟をあらためて持つことであり、そうした意味でいえば、「ケアの復権」のようなものであるといってもいいかもしれない。「じたばたもがき」ながら、こどもの状態像につきあうしかないのだと思う。

翻って、子どもの立場に立った時に、子どもは何に苦しんでいるのだろうか。自らの衝動や行動をコントロールできないことだろうか。そうしたこともあるかもしれない。だが、彼等が根本的に苦しむのは、愛されるべき存在である親から虐げられたこと、その結果として、親や住み慣れた地域等から分離され施設に入所すること、何時まで経っても家に帰れないという現実があることではないだろうか。「自分は何なんだ、必要ない存在なのか」、こうした苦しみではないだろうか。そうした生の苦しみを抱えているのだと考える。

そこで、本研究では、生の困難という言葉を手掛かりに、こどもたちの抱える苦悩の根源のひとつである家族に纏わる現実の焦点をあて、そこにどう向き合うか、どういう視点や態度で向き合えばよいのかを、職員、当事者の声から明らかにすること、それを本研究の意義としたい。

## 2. 研究の目的

子どもは基本的に親から大切にされた経験を通して「こういう自分でよいんだ」といった自己肯定感を育むといえるだろう。そうしたなかであって、施設に入所するこどもの多くはその親から虐待をされる経験を有する。もしくは、親はいるのに育てられないという理由で施設に預けられる。

ここにおいて、こどもの安全等を守るためではあるのだが、今日の我が国の措置制度にあっては、子どもは施設を自ら選択できない仕組みとなっている。

さらにいえば、入所してくる子どもたちは家庭復帰できる割合は決して高くない。「児童養護施設入所児童等調査結果」(令和5年)によると、約6割のこどもが、そのまま施設から社会に自立していくことが見通されている。

つまり、入所後も彼等は、親に迎え入れられることもなく、また、親という経済的にも精神的

にもあてにしたい存在とのつながりが乏しいなかで生きていくことになるのである。彼等たちは、親から傷つけられ、自分の意志でもないなかで施設に入所し、その後、親とは暮らせないなかで施設を退所していく。そうした人生の苦悩はいかばかりなのだろうか。そして、そのような人生を引き受けていくためには、何をどうしていくことが求められているのだろうか。

施設に入所するまでの傷ついた体験が、日々のくらしのなかで、そのいとなみのなかで問題事象として表出され、それは、食べることの拒否や眠ることの困難さとして、また、人との関係性における暴言等として、また、社会関係における不登校として、そして、生きることそのものの拒否としての自傷として、さらには、人生に目標をもてず、刹那的な生き方として、こどもたちは苦悩を表出する。そうした全体性をもった理解が重要である。

ここを手掛かりに、特に、家族に纏わる現実を引き受けることの困難さが生のいとなみの困難さとしてどのように捉えることが可能なのか、また、そこに懸命に向き合っている職員の支援内容と支援を受けた当事者の声から、その困難さを少しでも解消していくための方策を検討すること、それを本研究の意義としたい。

### 3. 研究の方法

研究方法は2点である。ひとつは、当事者、つまり、児童養護施設で育ち、退所者した方である。男女16名の方に自らの家族との関係において抱えた困難さについて語って頂き、データを収集した。その結果をライフストーリーから、入所時から施設で生活していた方、幼児期から学童期に施設に入所し、入所時の何等かの記憶のある方、何等かの虐待を受けたという認識のあり方とした。そのうえで、その語りから、生の困難さを導き出すという手法をとった。

もうひとつは、施設職員へのインタビュー調査である。20名の施設職員に子どもが抱える家族の纏わる困難にいかに関与しているかを聴き取り、グラウンデッドでオリ アプローチを通して分析を行った。

これらの調査結果をもとに、当事者の語りと職員の支援から、家族に纏わる困難とは何か、そして、その支援とはどうあるべきかを検討した。

### 4. 研究成果

まず、施設の子どもたちが変えていた家族に纏わる生の困難さとは、以下のようにまとめられた。

乳幼児から施設にいた方々は、「自分は『普通』ではないのではないか」といわゆる血縁家族を普通の定型な家族とする価値観を内面化させられていることによって生じる「異質な自己への戸惑い」を抱えていた。

幼児期及び学童期に施設入所した方々は、ケアしてくれる存在である職員とともに生活しているのに、その人が親ではないという現実、そして、親はいて面会や交流をしているのに面倒をみてくれない、そればかりか、自分が面倒をみていないということを棚上げして、親であることおしつけてくるといった「あいまいな」なかに置かれている「不確かな自分」であった。

何等かの虐待を受けた経験があると認識された方々は、ケアしてくれる存在である親に暴力をふるわれて施設に来たという現実、あたりまえの生活が剥奪されてきたというなかで構築されてきた「自分はそもそも生きていてよいのか」という「存在する価値のない自分」を抱え込まれていることだった。

以上の結果から、施設に入所してくる子どもたちの抱える家族との現実、彼等に彼自身の自己の意味付けをめぐって様々な課題を抱え込ませているといえる。自己をいかに自分で引き受けられるような再定義を図れるかが、重要な支援課題であるといえる。

そのうえで、いかなる支援が求められているかである。それは、受けとめの過程であった。そして、その過程とは、存在レベルの受けとめ、行動レベルの受けとめ、現実レベルの受けとめ、時間レベルの受けとめに整理することができた。以下に説明を行う。

#### (1) 存在レベルでの受けとめ

「存在を受けとめる」とはどういうことなのだろうか。それは、ありのままのあなたでよいということをしつくりと提示していくことに他ならないのではないだろうか。

それは入所から始まる。まずは彼等の入所までの暮らしを尊重する。その子がどのような暮らしをしてきたのかを想像しながら、その子がふるまうありようをそのまま尊重する。がその子どもに特に必要なかを想像するいとなみを「存在を受け入れる」ということなのだろう。

例えば、ネグレクトされてきた子どもは、極端なことをいえば、箸をもたずに食べるかもしれない。そうした子どもの存在を受けとめるためには、いきなりしつけをするのではなく、そういう暮らしをしてきたことを尊重する。無理に変えないのである。

そして、招き入れることである。ゆっくりと無理ないスピードである。温かい食事、温かな雰囲気、温かい言葉に包まれること。

次に存在を受けとめるとは、彼らたちが述べた2点を検討したい。

ひとつは、義務ではない仕事ではないかたちでそこにいるときに、彼等は受けとめられたと感

じていることである。いわば、職員もまたありのままにしているということである。理由や理屈ではなく、授業参観に出たいから、こどもが熱が出て、そこにたいたいからいる。それ以上ではない。これ見よがしに受け入れようとする姿勢や義務でされることは「重い」。これは、意味のない会話をしているときに、逆につながれていると感じることに似てはいないだろうか。目的をもった支援も重要である。でも、無意図的なかわりもまた、こどもを対象化するのでもなく、

もう一点が、語りたいことを聴いてもらえたとき、うけとめてもらったと感じていることである。子どもが話したいときに話せて、しかも、話したくないように、「なぜそう思うのか」と理由も聴かれることもなく、また、「そうじゃないでしょ」と否定されることもなく、ただ聴いてもらえる体験。それこそが、ありのままの自分であることを受けとめてもらえる瞬間なのである。

## (2) 行動化レベルの受けとめ

ある程度、「そういうあなたでよい」と日々のなかで示されると、こどものなかには、では今まではなんで自分は大切にされなかったのかという怒りや言葉にならない感情が出てくるのかもしれない。子どもたちになかには、行動レベルでの受けとめが必要な場合もある。

そのとき、私たちは、こどもを変えたい。目の前で繰り返される言動は受けとめ難いからである。でも、ここで重要なことは、子どもが変わるのを支えられるかである。

子どもが変わるためには、そこに受けとめが必要になると考える。このとき、私たちは何を受けとめているのだろうか。それは彼等の「どうにもならない自分がいることを受けとめているといえるのかもしれない」。なぜ自分が暴言を吐くのかもわからない。でもしてしまう。何度も何度も。それでも受けとめてもらえる。そのとき、どこかの瞬間で受け止められていると気づくのであろう。

そうになったときに、この世界を、自分を信じられるようになっていくのではないか。

## (3) 現実レベルの受けとめ

ここまでくると、自分がなぜ暴力を受けなければならなかったのか、なぜ家族と暮らせないのか、親はなぜ親なのに養育できないのかといった疑問を解決するためには事実を受け入れることが必要になると考えられる。

理由もわからず、不確かなままであるゆえに、自分への受け入れ難さは変わらない。大切なことは、受け入れ難くとも、事実と向き合うことが求められる。向き合うことが可能となるのは、存在を受けとめてくれる職員の存在が内在化され、彼自身も自分への信頼を取り戻していることが前提となる。

だが、児童養護の子どもたちの置かれている事実は受け入れ難いものである場合が少なくない。だから伝えた後、揺れる。生活が不安定にもなる可能性もある。それは、親に求めるのは難しいという事実なのかもしれない。それは受け入れ難い。したがって、時間をかけて、彼等が受け入れていけるようつきあい続ける。次の時間レベルの受けとめである。

## (4) 時間レベルの受けとめ

ある時は、「親はもういい」と思う日もある。だが、親と比較的良好にある子どもや家庭復帰する子どもみると、また引き戻される。そして、また親を求めたくなり、求めるが難しいという現実を知る。

退所後も親との関係は残り続ける。親はいつまでも子どもを求め続ける。むろんなかには親が肯定的に変化する場合もあるが、多くの場合、否定的な状態のままである。そうした現実が押しかかってくる。

親との接点はなくても、親との関わった過去の記憶がのしかかってくる。殴られたり、罵倒された記憶が。しかも、そのトリガーが、目の前にいる子どもであることも少なくない。

こうした時々、親をもとめたい自分、求めて傷つく自分、過去を支配され、どうにもならない自分がある。それでも、「そういうあなたでいいんだよ」と言い続けてくれる人がいる。伴走し続けてくれる職員の存在である。

こうして現実を受け入れ、同時に、そうした自分への受け入れも深化していく。

自己の再定義に向けて必要なことは、「そういうあなたでよい」というメッセージを伝え続けることなのだ考える。

そのためには、存在レベルでの受けとめに始まり、次に行動レベルでの受け止めとなり、そのうえで現実レベルの受けとめがある。だが、彼らとその現実を受け入れるのは容易ではない。時には、存在レベルの受けとめに戻ることもあれば、行動レベルの受けとめもまた求められる場合もある。そうして、受け入れは深化していく。そこには受けとめ続けるという意味での時間というレベルでの受けとめが求められる。

では、そもそも受けとめるとは何なのであろうか。それは、彼ら自身が受け入れられない自己を抱え、もがき、様々な行動をすることを受けとめ続ける過程に他ならないからではないだろうか。それぞれの受けとめは、彼ら自身の受け入れを深化させていくといふことなのである。

これまで記述してきたことでもあるが、受けとめは容易ではない。代理受傷という言葉もあるが、時に、職員は暴言を吐かれたり、怒りを子どもからぶつけられることもある。では、どうやったら受けとめは可能となるのであろうか。

子どもが暴言や怒りを表出するとき、まず私たちは、アセスメントを行う。理論をもちいて、

子どもの言動の背景を考察するのである。そして、その考察をベースに関わりを検討し、対応を図る。時には、チームで検討することもある。

だが、多くの場合、その理論を援用すれば子どもの困難が解決に至ることは少ない。むしろ、なかには好転するケースもあるだろう。しかし、重篤な課題を抱えた子どもであればあるほど、事態は膠着状況が続き、職員を困惑させる。逃げたくなるし、子どもを変えたいくなる。無力感にも苛まれる。理論は間違っていない、それを的確にできない自分のスキルが未熟云々。

このことをどう考えたらよいのであろうか。認知症のケアや看護を専門とする西川(2007)の言葉はその解決への糸口をくれる。

「ケアに関していえば、相手に関するデータを集め、ケアの様々な方法を勉強すれば十分にケアができるほどに、相手は簡単で透明な存在ではない、と覚悟することからケアを始める。居直りではなく、ある種の転回が必要になる。」(p105~106)

では、どういう転回が必要なのだろうか。理論は必要であるとする。事象を把握する枠組みとそこで求められる対応が理解できれば、進むべき方向性はわかる。そして、問題に向き合いにおいて、一時耐えることができる。

だが、子どもが自己を受け入れる道程はそれなりの時間と労力がある。その際に求められる視点は、「こうすればこうなる」といった科学的な因果関係モデルではなく、「いつまでこうしてつきあうのか、時には、後ろ向きになる自分を抱え、それでも子どもを思い、つきあいをやめない」といった逡巡型モデルなのである。

(文献)

・西川勝(2007)『ためらいの看護』岩波書店

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山田 勝美	4. 巻 9
2. 論文標題 子どもたちの声に導かれて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 産学官連携ジャーナル	6. 最初と最後の頁 19-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田 勝美	4. 巻 52巻4号
2. 論文標題 子どもの家族の現実に向き合う	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 児童養護	6. 最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------